

死をどうしたら受けとめられるのか③

おやさと研究所教授
堀内 みどり Midori Horiuchi

死について考える—岸本英夫の「生死観四態」(続き)

多様な生死観を

1. 肉体的生命の存続を希求するもの
2. 死後における生命の永存を信ずるもの
3. 自己の生命を、それに代る限りなき生命に托するもの
4. 現実の生活の中に永遠の生命を感得するもの

の4態に分けた岸本は、1を「死にたくない」という思いの最も素朴な表れとしています。2, 3, 4. は、肉体の死だけで、人間の死を終わりにしないという点で共通し、肉体の死だけでは人間は死を納得できないということを表しています。

さて、岸本によれば、避けられない肉体の死の事実をはっきりと認識した場合の人間の激しい生への執着に対する解答の一つとして、2の死後における生命の永存を信じるということがでてくるといいます。

死は、肉体的生命の終焉である。しかし、死によって終わりを告げるのは、生命の肉体的部分であって、生命全体ではない。肉体的生命は、生命の一部に過ぎない。生命の中には肉体に即しながらも、これから独立し得る部分がある。そしてそれは、むしろ、自我意識の中核を構成する部分である。かくて、いろいろな形で、広い意味での靈魂の觀念が形成される。(岸本英夫『死を見つめる心』講談社文庫、1973年、p.105)

こうして、生命は肉体と「靈魂」とによって形成されて、肉体よりも「靈魂」にこそ自我意識の中核があると考えられることとなります。岸本は「靈魂」があるというなら、その「靈魂」はどこで、どのような形をもって存在しているのかと問い、古来からある説をいくつかに分けて紹介しています。たとえば「死によって肉体を離れた靈魂は、その遊離した状態のまま、この地上に、存続しつづけている」「輪廻の思想(同じ一つの生命が、さまざまな生物の肉体を借りて、幾度も繰返してこの地上の生活を営む)」「理想世界、未来国の信仰」(同書、pp.106～107)があり、特に、「理想世界、未来国の信仰」は最も顕著に展開したとしています。

こうして、死を超えた生死観は、死の意味を変え(同時に生の意味も変わります)、死を「生命のあり方の、一つの切り替え時」(同書、p.107)と理解させることになりました。

「自己に代わる限りなき生命」を見出そうとする第3の類型では、自分の個体の外に、自分の生命に代わることのできる永遠の生命を見出し、それに自分の生命を托すことによって生死の問題を解決しようとするものと説明されます(同書、p.109)。つまり、自分が死に臨んだとき、自分とともに減びないものを求め、それに自分を結びつけ、果てのない慰めを見出す心情が働くがその心情こそが、ここにおける態度の基底であるとしています。そして、次のように述べています。

人間が、自分の存在を想う時に、限られた視野において見れば、一個の人間としての存在にすぎない。しかし、視野を拡げてみれば、それは、大いなるつながりの一点である。一個の人間として自分が現れるためには、その背後にいか

無限に長い生成編かの序列がある。その連鎖は、ほとんど無限といってもよいほどの長さを持っているが故に、その中の自分は、無にも近い極微の一点である。しかし、この一点は、極微ながら、全体の連鎖を構成する、欠くべからざる一点である。……(同書、p.111)

以上で示された肉体の不死、靈魂の不滅、自分に代わる生命の永続は、時間的な次元で生死の問題を捉えています。第4の類型では、生命の永存の問題を体験の場面として捉えているものであると岸本は語っています。これは心理的解決ともいべきもので、「現在の刻一刻の生活の中に、永遠の生命を感得せんとするもの」(同書、p.112)と語っています。例として、画面に没入し、一心不乱に画筆を運んでいる絵画の巨匠を挙げています。彼が体験する「澄み透った心境」「時間を忘れたかのような境地」の超絶感、永遠感(同書、p.113)がそれに相当するということです。宗教体験あるいは神秘体験に通ずるものでありましょう。

こうした永遠なる刹那の感得は、単に感情が昂揚した特殊な体験の状態においてのみ、味わい得るものではない。そうした体験を真に身につけることができたものには、いままでと同じ日常の社会生活の中に、同じ天地自然の間に、いままでと著しく異なった輝かしい世界を発見する。日常茶飯事の生活のそのままの中に、永遠の生命の宿るのを見出すのである。死すべき地上の生活が、そのまま、永遠なる生命となる。そして、生死の問題は、おのずから氷解し去るのである。(同書、p.115)

「私」が死を考える

以上のように、岸本は生死の問題を解決するために古来から説かれてきた「死」の解釈を4つに類型化して考察しました。実際には、私たちが死に直面し、死に向き合わざるを得ない時、すなわち、岸本が癌と向き合った10年間のように、真摯に死について考える時には、私たちが自分で構成していくであろう生死観は、この4つの類型で説明される生死観の諸要素の組み合わせであるかもしれません。また、日常的に接してきた宗教的言説や尊敬する人の生き方(死に方)を理想として、平素から思い描いている人もいるでしょう。

しかしながら、自分で自分の死について考える機会や時間があるというのは、幸運なことなのかもしれません。必ず訪れることでありながら、死はいつやって来るのか分からないのですから。

岸本が4類型で概説したような抽象的なこと、概念的なことだけでなく、現実には自分の死後の始末というようなことも、自分の死に伴っています。そして、折り合いをつけなければならないのは、自分自身だけではなく、遺された人々も同様です。

また、日本のように少子高齢社会になり、病院での死の方が普通であるような現代社会では、自分以外の死と直面することができなくなってきています。死に行く人に見え、世話をし、共同体がその別れを共有した時代ではないといわれて久しい現実を考えると、今生きている私たちにとって「死の準備」は必要不可欠と言ってもいいのではないのでしょうか。